

こころ

夏目漱石

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたいくなる。筆を執つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う氣にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は多少の金に工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達

は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかった。友達はかねてから国元にいる親たちに勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかった。けれども實際彼の母が病氣であるとなれば彼は固より帰るべきであつた。それで彼はとうとう帰る事になった。せっかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自

由のない男であつたけれども、学校が学校な
と年が年なので、生活の程度は私とそう変りも
しなかつた。したがって一人ぼっちになつた私
は別に恰好な宿を探す面倒もたなかつたので
ある。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだ
のアイスクリームだのというハイカラなものに
は長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。
車で行つても二十銭は取られた。けれども個人
の別荘はここにいくつでも建てられていた。
それに海へはごく近いので海水浴をやるには至
極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり
返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、こ
の辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思
うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いてい
た。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でこ
ちやごちやしている事もあつた。その中に知っ

た人を一人もたない私も、こういう賑やかな
景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべてみた
り、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るの
は愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓の間に見付け出した
のである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。
私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れ
ていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と
違つて、各自に専有の着換場を拵えていないこ
こいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着
換所といった風なものが必要なのであつた。彼
らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、こ
こで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい
身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりす
るのである。海水着を持たない私にも持物を盜
まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたび
にその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。

わたくし
私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生が
ちようど着物を脱いでこれから海へ入ろうと
するところであつた。私はその時反対に濡れた
からだ
身体を風に吹かして水から上がって来た。二人
あいだ
の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。
特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃
したかも知れなかつた。それほど浜辺が混雑し、
それほど私の頭が放漫であつたにもかかわらず、
私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人
の西洋人を伴つていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋
へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の
日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上に
すぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方
を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つ
のほか
の外何物も肌に着けていなかった。私にはそれ
が第一不思議だった。私はその二日前に由井が
はま
浜まで行つて、砂の上にしゃがみながら、長い

間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻
をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ
傍がホテルの裏口になつていたので、私の凝と
あいた
している間に、大分多くの男が塩を浴びに出て
来たが、いづれも胴と腕と股は出していなかった。
女は殊更肉を隠しがちであつた。大抵は頭
に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色
を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃し
たばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆
なの前に立っているこの西洋人がいかにも珍し
く見えた。

彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにござん
でいる日本人に、一言二言何かいった。その日
本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げていると
ころであつたが、それを取り上げるや否や、す
ぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人が
すなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下り

て行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻って来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとしてどこへか行ってしまった。彼らの出て行った後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人か想い出せずにしまった。

その時の私は屈托がないというよりむしろ無聊に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋ま

で出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被ってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い掛けたくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって雲の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。